

## 『直良信夫コレクション目録』の訂正ほか

Further Notes on the NAORA Nobuo Collection  
Owned by National Museum of Japanese History  
HARUNARI Hideji

## 春成秀爾

## はじめに

昭和時代の考古学・古生物学に大きな足跡をのこした直良信夫（元・早稲田大学理工学部教授，文学博士）は，1985年（昭和60）11月2日，出雲市の自宅で死去した。享年82歳であった。

その少し前に，直良と春成が親しい関係にあったことを知る直良の長男，直良博人（当時，オーストラリア国立大学生物科学研究所教授）から，直良関係の資料を国立歴史民俗博物館（以下，歴博と略す）に寄贈したいので，受け入れてほしいとの話があった。そこで，直良の歿後の翌年2月4日に私は直良未亡人の承諾を得て同月26日に島根県出雲市高松町にあった直良宅に赴き，直良関係資料一切をトラック1台に積んで佐倉に運び，歴博で受け入れ手続きをおこなった。

本稿とかかわりのある化石標本や貝塚出土獣骨などは，新聞紙で無雑作に包んだうえで段ボール箱につめてあった。ラベルの添付がないものも多く，出土地を墨で書いてない標本もあった。私は自分の記憶と直良の論著との照合によって個々の資料の産地を明らかにしていった。しかし，なか

## 直良信夫略歴

- 1902年(明治35) 大分県臼杵町で生まれる
- 1920年 岩倉鉄道学校工業化学科夜間部を卒業
- 1920-1923年 農商務省臨時窒素研究所に勤務
- 1923-1932年 姫路・明石に住み病気療養
- 1925年 自宅に直良石器時代文化研究所を設置
- 1932-1973年 東京都中野区江古田に住む
- 1932-1940年 早稲田大学・徳永重康から古生物学を学ぶ
- 1938-1956年 早稲田大学理工学部の事務職を勤める
- 1956年 早稲田大学理工学部専任講師に就任
- 1957年 文学博士(『日本古代農業発達史』)
- 1960-1972年 早稲田大学理工学部資源工学科教授
- 1985年 出雲市で死去



図1 直良信夫（『日本哺乳動物史』を著した1944年頃）と，彼の署名（古稀記念に出版した『野生動物観察記』を春成に贈った1971年）

には報告がまったくなく、産地を特定できないものも少なくなかった。それは、直良が1973年に早稲田大学を70歳で定年退職したあと、東京から出雲に引っ越すときは病後まもないころで、資料を整理し指示して梱包できるような状況ではなく、手伝いに来てくれた人たちに、ただ箱につめてもらうだけであったこと、もともと資料はきちんと整理した状態で保管されていなかったことに原因があった。出雲に転居したあとの直良は、段ボール箱を開梱することはなく、一室に天井近くまで積み上げたままにしていた。健康は不十分ながら回復したものの70歳をすぎ、地元紙に随筆などはこれまで同様に書いていたけれども、過去の収集品をもう1度取り出して研究するだけの体力と意欲はのこっていなかったのであろう。

資料を整理してみると、直良が書いた未発表の原稿や記録が少なからず含まれていることがわかった。敗戦前に書いた原稿や直良が調査したあと標本の所在が不明になったものも少なくなく、直良による観察と記述としてこれらも貴重であった。そこで、1986年以来、私はそれらを整理・編集して『動物考古学』などを利用して発表したほか、大部であった化石鹿の研究の原稿は『日本および東アジアの化石鹿』として刊行した。そして、2008年3月に『直良信夫コレクション目録』（国立歴史民俗博物館資料目録7）を刊行して、資料の寄贈にかかわるすべての作業を終えた。その間20年余り、資料が歴博にはいり、さらに目録を刊行したことにより、外部の研究者による資料の再検討や新たな研究が容易になった。その結果、目録の一部に誤記の存在が明らかになり、また新たな研究成果があらわれた。そこで、『直良信夫コレクション目録』および『動物考古学』掲載論文に関連する内容で、その後に判明した点を一文にまとめておくことにした。

## 1 『直良信夫コレクション目録』の訂正

最初に『直良信夫コレクション目録』（以下、『目録』と略す）の登録と巻頭カラー写真に示してある説明に間違いがあったので訂正しておきたい。なお、登録番号の最初につく「A-636-」は、本稿ではすべて省略してある。

### 1 プロボセラフスとトウヨウゾウの化石産地

巻頭写真「25 大型シカの頭骨化石 栃木県佐野市葛生 1-1-18-9」は、「25 プロボセラフス (*Proboselaphus watasei* Matsumoto) の頭骨化石 中国四川省 中期更新世 1-2-10-1」に訂正する。

巻頭写真「26 各種のシカの下顎骨化石 栃木県佐野市葛生 後期更新世 1-1-18-9」のうち、「6・8は25のプロボセラフスの下顎骨 中国四川省 中期更新世 1-2-10-1」に訂正する。3・5も付着している石灰華（トラヴァーティン）の状態が葛生産のものとは異なるようにもみえるので検査が必要であるが、現状では登録番号1-1-18-9のままにして「産地は不明」としておく。1-1-18-9の1ニホンムカシジカ 栃木県葛生、4・7 オオツノジカ 栃木県葛生は、標本に墨で産地と採集年月日を書きこんであるので問題はない。1-4-1の9 ヤベオオツノジカ（複製品）栃木県葛生大叶は、鹿間時夫が記載・命名した *Sinomegaceros yabei* のホロタイプ標本 [Shikama 1939] の複製品であるから間違いはない。なお、葛生町は、2005年に佐野市・安蘇郡田沼町と合併して佐野市になり、旧安蘇郡葛生町は消滅し葛生小字大叶は佐野市嘉多山町、宮下町、会沢町に分かれ、「葛生大叶」なる地名は存在しない。大叶は、嘉多山町にあった旧字名ということになる。しかし、現在の地名だけで



図2 歴博標本 (NMJH-1-1-18-9) と四川産のプロボセラフスの頭骨 [Matsumoto 1915]

かつての化石産地を指示することは困難であるので、ここでは「葛生大叶」としておく。

巻頭写真「32 トウヨウゾウの臼歯・牙・四肢骨化石 栃木県佐野市葛生大叶第4採石場 中期更新世 登録番号1-1-18-3」のうち、「左上のトウヨウゾウの臼歯化石片2点は中国四川省 中期更新世 1-2-10-1」に訂正する。のこりは、「1-1-18-3 ゾウの牙・四肢骨化石 栃木県佐野市葛生大叶第4採石場 中・後期更新世」としてのこす。

中国四川省の化石標本にはラベルがついてなく、標本にも産地の書き入れがなかったが、化石の状態や付着している石灰分の外見、および直良の著書の記述から栃木県葛生産と判断した。しかし、目録を公表後に<sup>この</sup>甲能直樹（国立科学博物館筑波生命進化史研究グループ）から、写真25の標本は松本彦七郎（当時、東北帝国大学理学部地質学古生物学教室教授）がかつて報告した四川省産の動物化石であるとの指摘をうけた。そこで、2012年11月12日、国立科学博物館図書室（筑波）で松本の報告〔Matsumoto 1915〕に目を通す機会を得て、松本が新属新種として記載したプロボセラフス（*Proboselaphus watasei* Matsumoto）（中国名：渡瀬原藍牛<sup>わたせげんあいぎゅう</sup>）のホロタイプ標本であることを確認した（図2）。さらに葛生産とした写真32のトウヨウゾウの臼歯化石標本も、松本の報告に写真が掲載されており、四川省産であることが判明した（図3）。なお、松本の報告では、プロボセラフスの頭蓋骨と下顎骨は咬合したままであるが、現在では両者は分離しており、下顎骨は左右ともにかなり失われている。直良が、つぎに述べる福岡県松ヶ江村吉志洞窟産の下顎臼歯を「プロボセラフスの一種（*Proboselaphus* sp.）」とした〔直良1954：130〕のは、この標本との比較が可能であったからであろう。

松本の報告によると、四川省の化石標本はT. Sakawa（佐川または酒匂）が中国四川省の石灰岩地帯（a certain marly district）で収集し、渡瀬庄三郎（元・東京帝国大学農学部動物学教室教授）に寄贈したもので、松本は師である渡瀬の好意と指導のもとにこのコレクションの研究にあたったという。種名を*watasei*としたのは、師の恩に対する松本の気持ちのあらわれである。この標本に付着している石灰華および化石化の状況は石灰岩の裂隙堆積物であることを示している。四川省の石灰岩裂罅では、*Stegodon orientalis* Owen（中国名：東方劍齒象、和名トウヨウゾウ）のホロタイプ標本を出土した万県塩井溝が19世紀以来有名で、この標本もこの地で収集された可能性が高い。この標本が早稲田大学獣類化石研究室に収蔵されているとの記述は松本の報告にはみえない。直良は1973年に著書『古代遺跡発掘の家畜遺体』に「中国四川省石灰洞発掘の牛歯」として、*Bibos geron* Matsumoto と *Bubalus?* sp. について再記載している〔直良1973：38～44〕。これらの標本が、なぜ早大獣類化石研究室蔵になっていたのかの説明はないけれども、徳永が東京帝国大学理科大学で動物学を修めたのち、大学院で地質学を学んだという経緯から、渡瀬が徳永にこの標本を譲渡したのであろう、と私は推察する。

プロボセラフスはCavicornia目、Gazellinae科、原藍牛属の獣類、すなわちガゼルの一属で、松本はこの標本をホロタイプ標本にして新属新種を命名している〔Matsumoto 1915〕。松本によると、プロボセラフスは*Boselaphus* ボスエラフスにひじょうに近いが、より原始的であって、ある特徴はよりbobine的である。この種の発見はbobinesの起源が東洋にあるとする仮説にとって一つの追加事実になり、その年代は鮮新世の新しいところである。トウヨウゾウの化石を伴っているので、現在の知識でいえば、中期更新世である。

この属種について1942年刊のP. テイヤール・ド・シャルダンとP. ルロイの *Chinese Fossil Mammals* では、実際に使うには特徴が不十分で、将来、破棄されるかもしれないと註に書いている [Teilhard de Chardin and Leroy 1942:3]。しかし、1979年刊の中国科学院古脊椎与古人類研究所編の『中国脊椎動物化石手冊』には、プロボセラフスは松本の記載をそのまま載せている [中国科学院古脊椎与古人類研究所編1979]。プロボセラフスの研究にその後の進展があったのか、私は知らない。松本は、宮城県青島貝塚と川下<sup>ひびく</sup>り響貝塚で発掘した縄文中・後期のイノシシ骨を頭骨の小変異にもとづいて4亜種に分けたくらいの典型的な splitter 型の研究者であったから、*Proboselaphus watasei* と同時に発表した *Proboselaphus liodon* (中国名：平<sup>へい</sup>歯<sup>し</sup>原<sup>げん</sup>藍<sup>あい</sup>牛<sup>ぎゅう</sup>) との関係など問題はあるように思う。いずれにせよ、直良コレクション中のこの化石は、プロボセラフスについて論ずるさいのホロタイプ標本として貴重である。



図3 歴博標本 (NMJH-1-1-18-3) と四川産のトウヨウゾウの臼歯 [Matsumoto 1915]

## 2 佐渡鷺崎セコノ浜洞窟のイノシシ

島嶼の縄文・弥生遺跡から出土するイノシシの骨については、本来そこに生息していたイノシシを捕獲したのかという大きな問題がある。佐渡、伊豆諸島、琉球列島、さらに北海道のばあいもそうである。ヒトがイノシシの生体を運んだか、骨または肉付きの骨を運んだか、そうでなければイノシシが自ら泳いで渡海したかである。直良は早くからこの問題につよい関心を寄せ、縄文時代以来、島に住む人たちが「食糧政策」として生きたイノシシを運んでいたことを考え、伊豆の三宅島コハマ浜遺跡発掘の臼歯についてはブタと同定していた[直良1938]。弥生時代にブタが存在したことを指摘した最初の論文である。佐渡のイノシシについては、直良の原稿を私は整理して「佐渡の自然遺物」として発表した[直良(春成編)1997]。

昭和初期に新潟県佐渡の三宮貝塚と鷺崎セコノハマ洞窟から発掘された獣骨の一部は地元の収集者から譲りうけて直良コレクションに含まれている。そのうちのイノシシ骨(図4)を山崎京美(いわき短期大学)が調査した。山崎によると、外見からすると、三宮貝塚の資料(NMJH-1-2-86)は縄文時代のものとみてよいが、鷺崎セコノ浜の資料(NMJH-1-2-85)は佐渡博物館収蔵品もあわせて劣化の度合いが小さく、新しい時代のものという印象をうけるとのことである[山崎2010:163]。鷺崎セコノ浜のイノシシ骨は後世とすれば何時代のものか、年代測定の必要がある。後世のばあいでも、人が運んだものか、イノシシが泳いで渡ったのかの問題がのこっているからである。

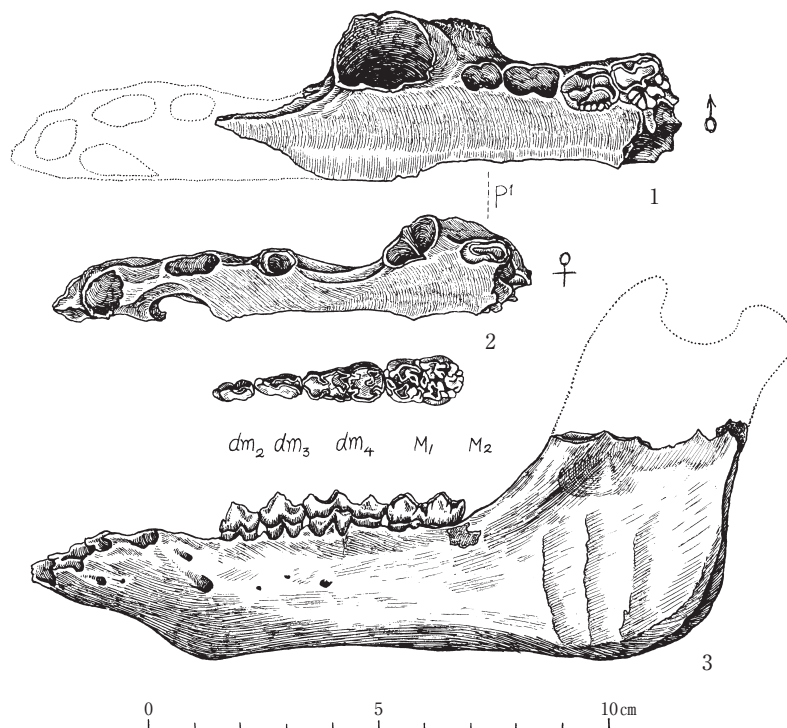


図4 鷺崎セコノ浜洞窟のイノシシ骨 (1 雄・上顎骨, 2 雌・上顎骨, 3 幼獣左側下顎骨)  
(NMJH-1-2-85) [直良(春成編)1997]

### 3 兵庫県西八木の「旧石器」

直良は、1930-31年に明石市大久保町西八木海岸の「中部洪積期」の砂礫層から採集した石片を「旧石器時代の石器」と考えて、日本にナウマンゾウなどを追って当時陸続きであったアジア大陸から人の渡来があったことを主張した〔直良1931, 1954〕。その根拠になった剥離面をもつチャートの礫2点が直良コレクションのなかに含まれている。『目録』8頁の図6は、直良が作成した図である。この礫は戦火をくぐって残ったもので、戦後になって、直良は文部省東京科学博物館（現・国立科学博物館）の研究者をしていたことから同館に寄託し、1960年代には展示してあったのを私は見たことがあった。その後、展示場からさげて収蔵庫で保管していたので、直良コレクションが歴博蔵となった機会に同館の長谷川善和に事情を話し、返却してもらったものである。『目録』には載っていないので、「A-636-3-1-32-1・2 兵庫県明石市大久保町西八木海岸 自然破碎礫 チャート 2 1930-31 直良が旧石器として報告したもの」として、『目録』119頁に追加登録しておく。

この剥離面をもつ礫については、芹沢長介（当時、東北大学日本文化研究所）が1970年に石器と認めて再報告をおこなった〔芹沢1970〕。しかし、1984年に私は再検討し（図5）、「古八木川」を自然礫が流搬する最中にぶつかりあって生じた「自然破碎礫」であるとする見解を発表した〔春成1984, 1987〕。その後、私見に対する反論はない。しかし、この礫2点は昭和初期に直良が日本旧石器時代の存在を提起する根拠になった資料として、学史的意味をもつ貴重な資料である。また、松本清張が直良をモデルにして書いた小説「石の骨」〔松本1955〕にでてくる「石器」とあるという点で、別の意味で価値をもっている。

直良は、1931年4月18日に上記の「旧石器」を採集した同じ地点で、崩壊した砂礫層から一部露出していたヒトの寛骨片を発見した〔直良1936, 1954〕。これが「石の骨」つまり明石人骨である。直良は、その時点で詳しい報告をすべきであったが、それをおこなわないままに1945年5月の東京大空襲で焼失した。戦後の1947年に長谷部言人（元・東京大学理学部教授）はその石膏模型を調べ

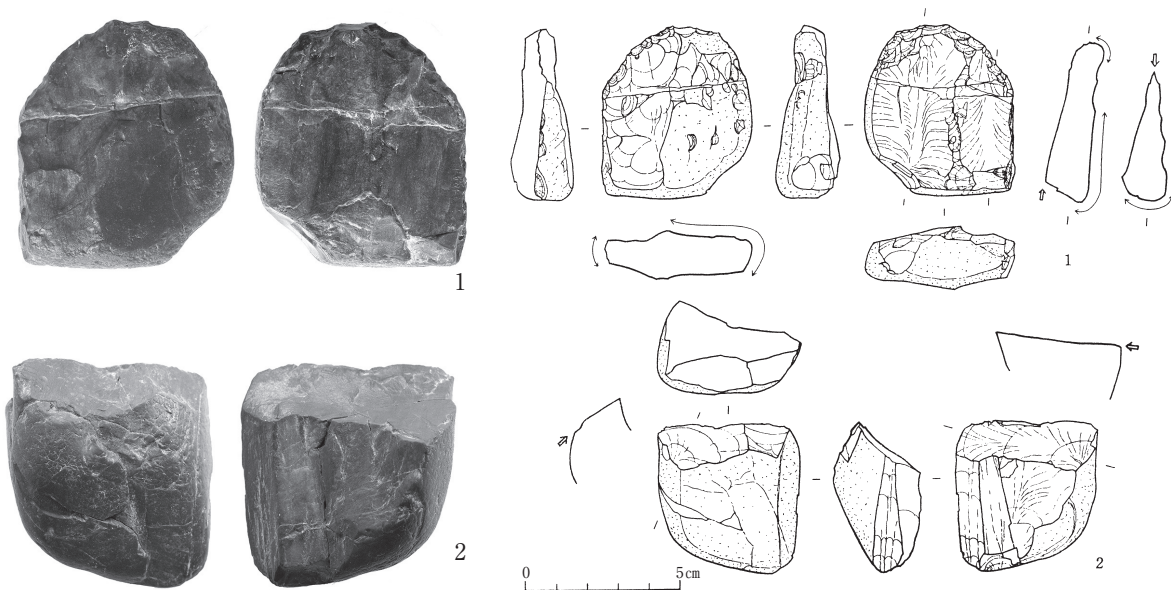


図5 明石市西八木海岸出土の剥離面をもつチャート礫（NMJH-3-1-32-1・2） 図は〔春成1984〕

て、「シナントロプスおよびピテカントロプスに列する最新世前期人類」と発表した〔長谷部 1948〕。長谷部の *Nipponanthropus akashiensis* はその後、「明石原人」と呼ばれることになる。1982年にたって、遠藤萬里（当時、東京大学理学部）・馬場悠男（当時、獨協医科大学）は、世界の猿人から現代人の寛骨と比較し、現代人骨の可能性がきわめて高いことを論じ〔Endo and Baba 1982, 1985〕、それ以降はこの説が最有力となり、現在にいたっている。

私は、倉橋一三（当時、明石女子師範学校教諭）が撮影した付近の写真を、人骨発見直前の1931年4月10日に撮影したものと判断し、発見の状況を推定してみた〔春成 2013〕。もちろん、このような作業によって「明石人骨」が復権するというものではない。松本の「石の骨」は、演劇にもなり有名であるけれども、これは直良の個人的な感情を松本が代弁して描いた、あくまでもモデル小説であって、真実ではない。これがあたかも客観的な事実をのべているように誤解されることが多いので、私は事実に則して書いておいた〔春成 2005, 2006〕。

私たちは1985年3月に付近の砂礫層を発掘して木片などを発掘していたので、2011年にパレオ・ラボで再度、炭素14年代の測定をおこなった。その結果は、「43,400yrBPより古く、しかも59,700yrBPを超える年代をもっている可能性がある」というものであった〔春成ほか 2012〕。

なお、『目録』の巻頭図版61の「直良石器時代文化研究所所報」第1輯と第3輯の登録番号が誤っており、目録には載っていないので、次のように訂正し、『目録』の167頁に追加する。「A-636-6-1-49 『播磨国明石郡垂水村山田大歳山遺跡の研究』直良信夫 1926年1月1日、直良が晩年に渡辺九一郎からもらったもの」、「A-636-6-1-50 『中ノ御堂砂丘遺蹟』直良信夫 1927年6月1日直良が晩年に渡辺九一郎からもらったもの」。

『大歳山』は、直良が明石時代に自宅に「直良石器時代文化研究所」の表札をさげて、その所報第1輯としてコンニャク版印刷、58頁、30部発行、『中ノ御堂』はその第3輯として謄写版印刷、9頁、15部発行したもので、私が知るかぎり前者は5部、後者は2部現存の稀覯本である。いずれも、直良の歿後に私が編集して発行された直良（春成編）1987『大歳山遺跡の研究』と直良（春成編）1991『近畿古代文化論考』に再録してある。

## 2 直良コレクションの研究成果

直良コレクションのうち、特に価値の高い資料は、古脊椎動物のホロタイプ標本（模式標本）の類である。これらのうち大部分は直良の収集品ではなく、早稲田大学で直良の師にあたる徳永重康のコレクションであって、「早稲田大学獣類化石研究室」の旧蔵品であった。直良はこれらを1944年に著書『日本哺乳動物史』に図をつけて取りあげていたが、戦後は戦災によって焼失してしまったとくりかえし記述していた。だから、出雲の直良宅から段ボール箱を歴博に運び梱包を解き、ラベルもなしに古い新聞紙で無造作に包んである「ブラキオダス」、「ヒラバヤシジカ」、「ワタセトド」など『日本哺乳動物史』に掲出されている見事な図で記憶にのこっている化石を手にしたときに、私は信じがたい思いをしたものである。

### 1 福岡県松ヶ江動物群の研究

「松ヶ枝動物群」は、福岡県北九州市門司区吉志（旧・企救郡松ヶ江村）にあった洞窟から1940



年代に石灰岩採掘中に産出した動物化石群に与えられた名称で、中期更新世の日本列島を代表する動物群として著名である〔湊 1974 : 95, 河村 1991 : 164-167〕。

松ヶ江村の洞窟について最初に注意したのは地元の荻原武平(当時, 企救中学校校長)で, 彼は「松ヶ枝村大字恒見字浦中」(松ヶ枝村は松ヶ江村の誤記)から「象牙の化石」が出土したことを松本彦七郎(当時, 東北帝国大学地質学古生物学教室教授)に手紙で知らせ, その標本を彼の元に送る一方, その発見を『地質学雑誌』の雑報欄に書いている〔荻原 1925 : 528〕。象牙の化石は「海に南面し汀線より約 2 丁はなれ, 海面より約 200 米の高さにありて, 現在小野田会社の採掘しつつある石灰岩の割れ目より出でたるもの」で, 採集者の佐藤辰之によると, 「一時に約百斤位も出でたるも無智なる工夫はこれを海中に投じて残るはこの 1 破片のみなりと」, さらに「この所より東方約 2 軒余に吉志といふ地あり, こども石灰岩の地にして哺乳類の骨片及菌等の化石を多く産す」ことを報告している。これを読んだ徳永重康は 1930 年に現地を調査し, 「企救郡松ヶ枝村吉志」に獣類化石が採集される洞窟があり, また「松ヶ枝村」に近い「恒見」からも象牙の出土があったことを記している〔徳永 1930〕。

荻原から松本に送った象牙は「豊前企救郡松ヶ江村恒見(裂罅堆積物, 東北帝大地質学古生物学教室蔵)」と鹿間時夫(当時, 東北帝国大学地質学古生物学教室副手)が記し, 現在, 東北大学総合学術博物館蔵になっている標本であって〔鹿間 1937〕, 私は 2007 年 2 月 15 日に東北大学理学部自然史標本館を訪ね, 根本潤の世話で観察することができた。残存長は 11.1cm, 径は太いほうが 5.5cm×5.3cm, 細いほうは 5.0cm×5.0cm のこの部分では屈曲のない細い牙の小破片である(図 7-1)。表面を多条の凹線が走っているのは, 牙の表層が剝離していることを示している。長軸方向に走る細い亀裂にはやや黄みをおびた赤色土が詰まっている。

直良は, 「松ヶ枝洞窟は門司市松ヶ枝町恒見吉志にあつて」と書き〔直良 1954 : 126〕, この洞窟を「松ヶ枝洞窟」とも「恒見洞窟」とも書いていたが, 当時の地図にでていいるのは「松ヶ江村吉志」と「松ヶ江村恒見」であつて, 「松ヶ枝」は「松ヶ江」の誤記であり, 松ヶ江村には動物化石を産する

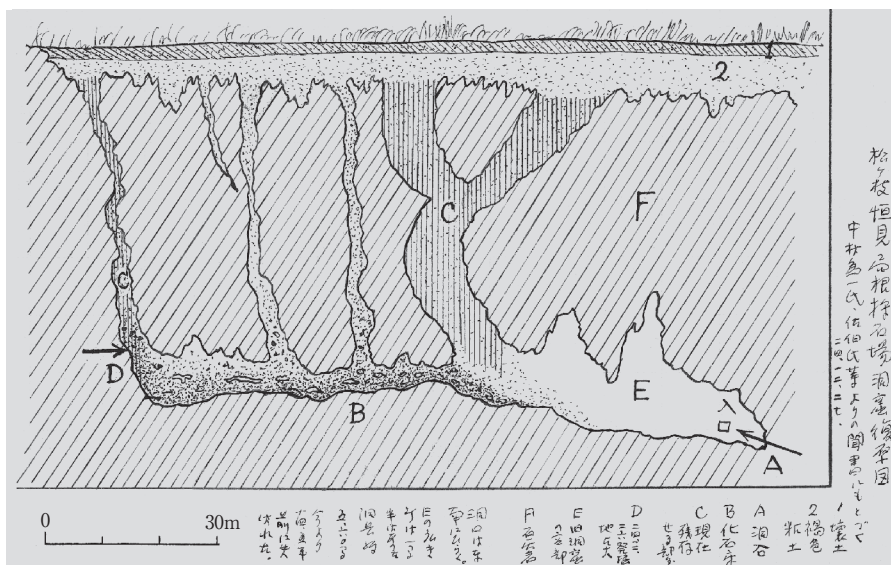


図 6 福岡県企救郡松ヶ江村吉志洞窟の垂直断面復元図〔直良 1954〕  
 1 壤土, 2 褐色粘土, A 洞口, B 獣類化石床, C 現存する旧洞窟裂罅の一部,  
 D 1949 年 12 月 16 日発掘調査地点, E 旧洞窟の空洞部, F 石灰岩

洞窟は吉志と恒見に存在し、両者は別々の場所であるから、吉志と恒見を同じと見ている直良の表記は誤りである。直良が採石関係者からの聞き取りで描いた「松ヶ枝恒見局根採石場洞窟復元図」(図6)も、「松ヶ江吉志局採石場洞窟」と訂正すべきである。1935年5月に吉志の裂罅堆積物を調査した鹿間時夫も「松ヶ江村吉志の局採掘所」とはっきり書いている[鹿間1943:37]。徳永・直良の標本は松ヶ江村吉志で収集したものであるから、吉志からの発見化石だけを「松ヶ江動物群」とするのが正しいことになる。なお、「松ヶ江」の地名は、現在、JR日豊線の駅名に「松江駅」としてのこっているだけである。

松ヶ江動物群を本格的に研究して学界に報告したのは直良である。直良は戦災でほとんどの標本を焼失したと書く一方、松ヶ江動物化石標本の一部がのこっていたと書いていた。しかし、直良は1954年に動物群の種名リストを発表したあと、その後はアカオオカミと「ムカシカワウソ」について個別の報告をしたにすぎない[直良1954, 1958, 1968]。しかし、標本の公開施設もなく、誰も再検討することもない状態で、その後は検証ぬきで直良が作成した化石のリストだけが1人歩きする結果を招いた[湊1974:95, 河村1991:166-167]。

直良コレクションのなかには、小さな破片だけであるが、標本が一定量のこっていた。私はそのことに気づき、松ヶ江標本として選び出し、大塚裕之(当時、鹿児島大学理学部教授)にそのことを伝えたところ大塚が研究を希望したので、その後、大塚の指導のもとで荻野慎太郎(当時、同大学大学院博士課程学生)がもっぱらクリーニングと同定作業をすすめ、最終的に筆者を含む3名で2009年に記載報告をおこなった[Ogino, Otsuka and Harunari 2009]。同定できた哺乳動物化石の種は以下のとおりである。

ノウサギ、イタチ、アナグマ、ニホングリソン(直良の「ムカシカワウソ」)、アカオオカミ、トラ、シカ的一种、イノシシ、サイ、ニホンザル

松ヶ江動物群は、ニホングリソン、アカオオカミ、トラ、サイのような絶滅種を含む一方、ノウサギ、アナグマ、イタチ、イノシシ、ニホンザルのような現生種が多い。私たちは、松ヶ江動物群を第四紀哺乳動物帯4(QM4)すなわち中期更新世中頃、50~30万年前と位置づけた。これらの多くは周口店第1地点の動物群の要素であって、43万年前に朝鮮半島を経て渡来したことを示している。

直良は1944年に著した『日本哺乳動物史』に掲載の「日本哺乳動物化石出土地名表」に「松ヶ枝村恒見洞窟(ステゴドンに属する臼歯片の発見あり、その他門歯片、骨片の出土もあったといふ)」と伝聞形式でステゴドンの化石が出土していることを書いている[直良1944:255]。この臼歯は写真と計測値がのこっており、その存在を確認できる[直良1954:5,

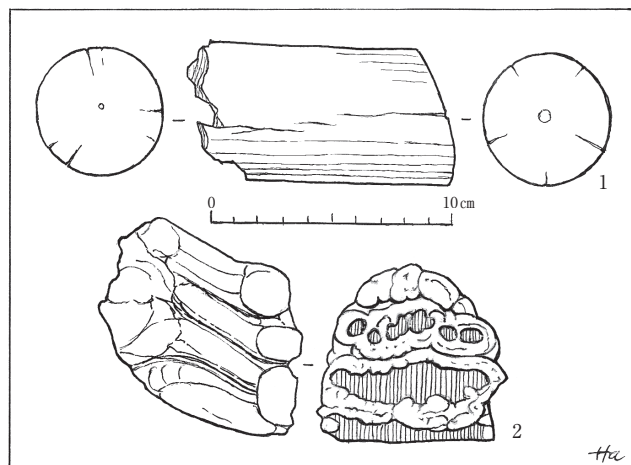


図7 松ヶ江村恒見洞窟出土の象(*Stegodon orientalis*)の牙と臼歯の破片

1 東北大学総合学術博物館標本, 2 消失, 写真から春成作成

直良（春成編）1999:95】（図7-2）。しかし、この標本は直良コレクションに含まれていない。「地名表」に「徳永・直良採集」と記していないのは、早稲田大学の収蔵品でなかったことを示している。

その一方、直良は「佐藤傳蔵氏によれば、本洞窟から産した他の旧象は、明らかにナウマン象であったといわれる」と述べている[直良1954:5]。佐藤傳蔵（元・東京高等師範学校教授）が「ナウマン象」と判定した資料は、直良の記述以外に何ものこっていないので、どのような経緯で見つかったのか、わからない。標本は、佐藤が所有していたというが、直良は自らの目で確認しているわけでない。

松ヶ江動物群の構成要素として「ステゴドン的一种」を直良があげたために、かつてはこの動物群は中国南部の万県動物群と関連が深いと理解されていた[湊1974:95]。松ヶ江動物群とゾウ化石との関係を知りたいところである。問題は、動物化石を産する洞窟が吉志と恒見に存在したことに対する認識がなかったことである。松ヶ江村の化石について最初に報告した荻原は恒見洞窟出土の象牙について報告している。それが東北大学学術博物館蔵の牙破片であって、直良のいうステゴドンの臼歯はこのとき前後の収集品と考え、ステゴドンは松ヶ江動物群のリストから外しておくべきであろう。

その一方、徳永・直良の採集品は吉志洞窟の可能性が<sup>おふくだい</sup>つよい。

日本列島の中期更新世の動物群は他には山口県美祢市<sup>おふくだい</sup>於福台安藤大理石採石場裂罅で知られているが、ここでは長鼻類はナウマンゾウである[長谷川1966, Hasegawa 1972, Kawamura 1988]。

松ヶ江動物群のうち、個別に詳しい研究が発表されているのは、戦前の斎藤弘によるアカオオカミ[斎藤1939]、戦後の直良によるアカオオカミ[直良1958]と「ムカシカワウソ」[Naora 1968]、荻野慎太郎・大塚裕之によるニホンザルと *Oriensictis nipponica*（直良の「ムカシカワウソ」）であり、そのほか九州大学学術博物館蔵の「マツガエサイ」の下顎骨について岡崎美彦による紹介記事がある[岡崎1982]。

ニホンザルは、ほぼ完全な頭骨で、直良が *Macaca cf. fuscata* として報告したものであるが、リストにあるだけで記載はしていなかった。荻野と大塚は *Macaca fuscata* と同定している。ニホンザルは中国の周口店動物群を特徴づける重要な要素である[荻野・大塚2005]。

直良がカワウソの絶滅新種として記載した *Lutra nipponica* Naora 1968（ムカシカワウソ）は、荻野と大塚が食肉目イタチ科 Galictini（グリソン）の新属 *Oriensictis nipponica* Naora とし、周口店第1地点の中期更新世の北京原人骨に伴った *Lutra melina* [Pei 1934:76-80] も *Oriensictis* に編入した[Ogino and Otsuka 2009]。*Oriensictis* は東洋のイタチ類の哺乳類の意味である（図8）。グリソンは、メキシ

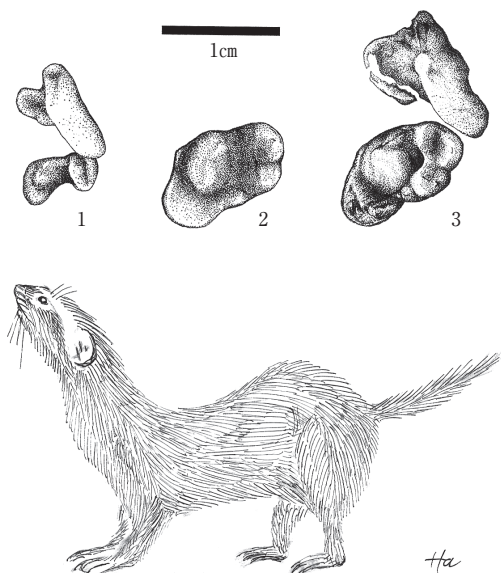


図8 グリソンの下顎P<sub>4</sub>M<sub>1</sub>の比較図[Ogino and Otsuka 2008]と現生グリソン（春成図）  
 1 オオグリソン（現生）*Galictini vittata*  
 2 ペキングリソン（中期更新世）*Oriensictis melina*  
 3 ニホングリソン（中期更新世）*Oriensictis nipponica* (NMJH-1-1-35)

コ以南、ウルグアイ・ブラジル・チリまでの中・南アメリカに現生し、ネズミ、小鳥、カエル、昆虫など肉食を主とし、果実類も食べる動物である〔今泉1984〕。体長は *Galictini vittata* (オオグリソン) が48~55cm, 尾長16cm, *Galictini allamandi* (メキシコグリソン) が40~45cm, 尾長15~19cmを測る。グリソンもまた、周口店動物群を特徴づける要素として、中国北部と日本列島とを結ぶ太い線になるだろう。私は、周口店産をペキングリソン、松ヶ江産をニホングリソンの和名で呼ぶことにしたい。ニホングリソンはペキングリソンの子孫型なのであろう。どちらもサイズは現生種よりも、はるかに大きい。

## 2 「ブラキオダス」(エロメリクス)の研究

『目録』巻頭写真「1 第三紀の偶蹄類の下顎骨化石 *Brachyodus japonicus* Matsumoto in Tokunaga 1-1-37」は、長崎県東松浦郡大野村池野炭坑第4坑(現・佐世保市大野町池野、廃坑)から見つかった左下顎骨破片である(図9-1)。この標本は1920年代に見つかり、伊万里炭田の地質年代を研究していた徳永重康が入手、同炭田の年代を特定する鍵になると予想して松本彦七郎に研究を依頼した。松本から論文形式の詳しい説明書を受け取った徳永は、論文「佐世保伊万里炭田と其時代」のなかに、松本の所見をそのまま収録したことによってその存在が知られるようになった〔徳永1925〕。その後も松本は自身の名前で論文を発表しなかったため、オリジナルの研究をおこなった者の正報告がないまま学界で承認されホロタイプ標本となった珍しいケースである。ブラキオダスはヨーロッパで炭坑から出土したことから和名では炭獣科に属する。この標本は佐世保層から見つかったため、日本列島の第三紀下部の漸新世—中部漸新世に年代づけられ、日本列島最古の哺乳類(偶蹄類)とされてきた。直良は戦前にこの標本を詳細に調査して『日本哺乳動物史』に見事な図(図9-2)を掲載する一方、未発表の原稿に詳しい記述を残していた〔直良1944:13, 直良(春成編)1997:3-5〕。ブラキオダスの化石は、その後1977年に山口県豊北町(現・下関市)鍋島の日置層群峠山累層から分断した状態の頭蓋骨と第一頸椎が産出した。頭蓋骨の長さは40cmもあって、*Brachyodus japonicus* とは別種であるため、報告者の岡崎美彦は *Brachyodus* sp. としている〔岡崎2003〕。年代は後期漸新世という。

直良コレクションのブラキオダス標本は歴博蔵になってから鏗本武久(現・愛媛大学大学院)と甲能直樹が再記載をおこない、進化史上の位置をはっきりさせた〔Tsubamoto and Kohno 2011〕。鏗本らの研究によると、標本の下顎は小型で第4前臼歯の特徴は *Brachyodus* 属になく *Elomeryx* 属に認められることから、*japonicus* は *Elomeryx* 属に移される。*Elomeryx japonicus* は、現在では後期漸新世、佐世保層群の中里層から産出したとされ、フィッショントラック年代は  $28.1 \pm 2.8$  百万年前~  $30.7 \pm 3.7$  百万年前の間、つまり約3,000万年前の陸獣である。鏗本らによると、後期始新世の *Elomeryx* の古いグループがヨーロッパ、中国南部・東部とアメリカ北部で確認されており、前期漸新世の *Elomeryx japonicus* は中国の *Elomeryx cf. crispus* の進歩的なグループに属し、岡崎が報告した後期漸新世の大型種の *Brachyodus* (これも鏗本らにより *Elomeryx* に移されている) sp. は、一時期新しくなるようである(図10-1・2)。

現在では、「日本列島最古の哺乳類」は、白亜紀前期(1億4,000万年~1億1,200万年前)の化石が、石川県白山市から三錐歯類 *Hakusanodon archaeus* と多丘歯類 *Tedoribatal rainei*、兵庫県篠山市から

真獣類 (*Sasayamamylos kawai*) などの発見により中生代までさかのぼっている。新生代の大型哺乳類も、前期始新世 (約 5,000 万年前) の汎歯類のコリフォドン科や裂歯類のトロゴサスの化石が熊本県天草市牧島から見つかった。しかし, “*Brachyodus japonicus*” は長い間, 「日本最古の陸獣」の位置を占めていた歴史的な標本であり, *Elomeryx* の進化史を研究するうえでの重要性は不変である。

本標本は下顎骨の小破片にすぎないが, 鹿間時夫の遺著『古脊椎動物図鑑』(1979 年) に, 体長 2.9m, 肩高 1.4m のヤギに似た体形の偶蹄類, エロメリクスとして B. フォースフォールの復元にもとづいて W.B. スコットが描いた復元図をアレンジした藪内正幸の図を載せているので, 紹介しておく (図 9-3) [鹿間 1979 : 184-185]。

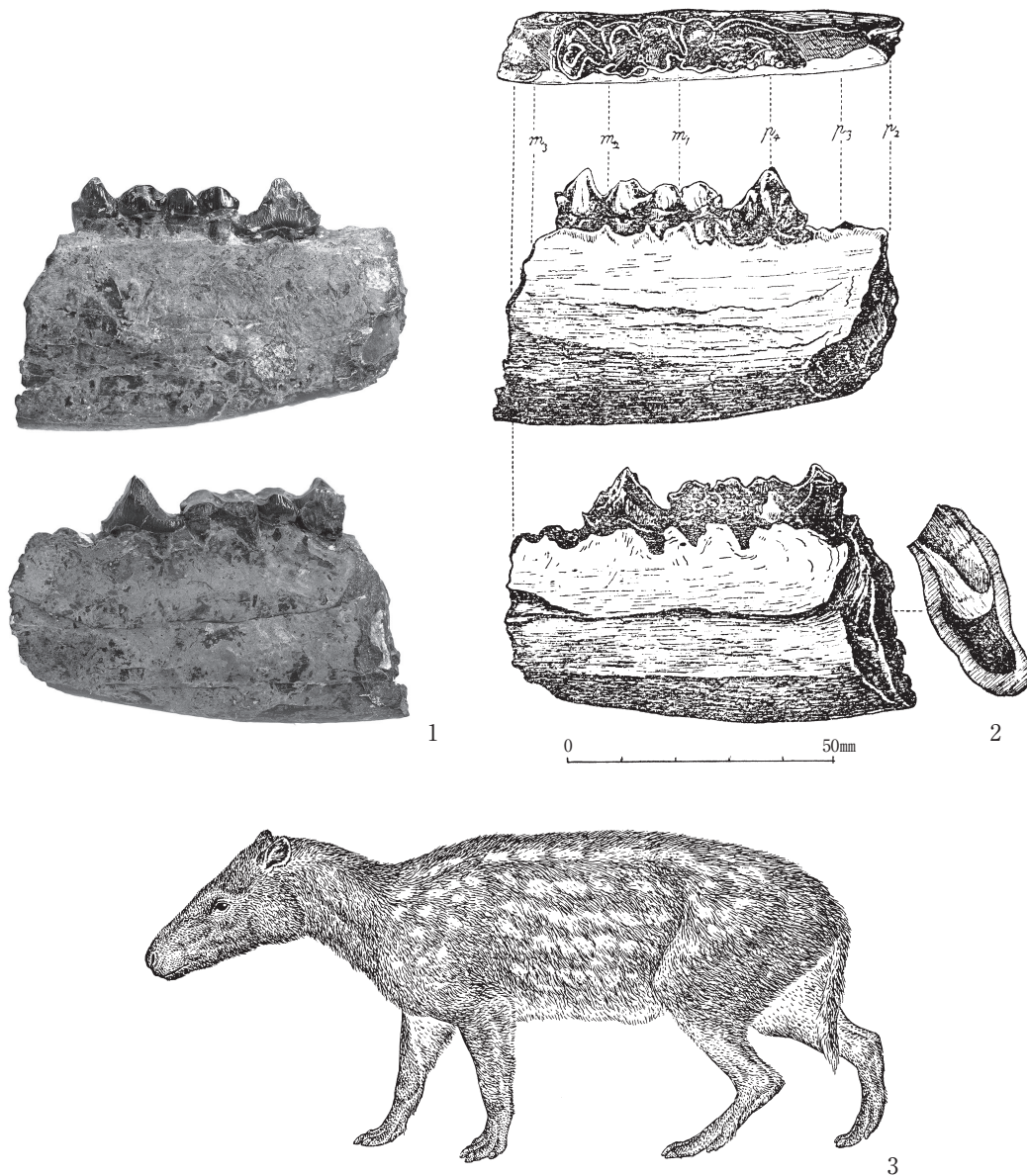


図 9 エロメリクス

1 *Elomeryx japonicus* の下顎骨 (NMJH-1-1-37) 2 「ブラキオダス ジャポニクス」[直良 1944]  
3 エロメリクスの復元図 [鹿間 1979]

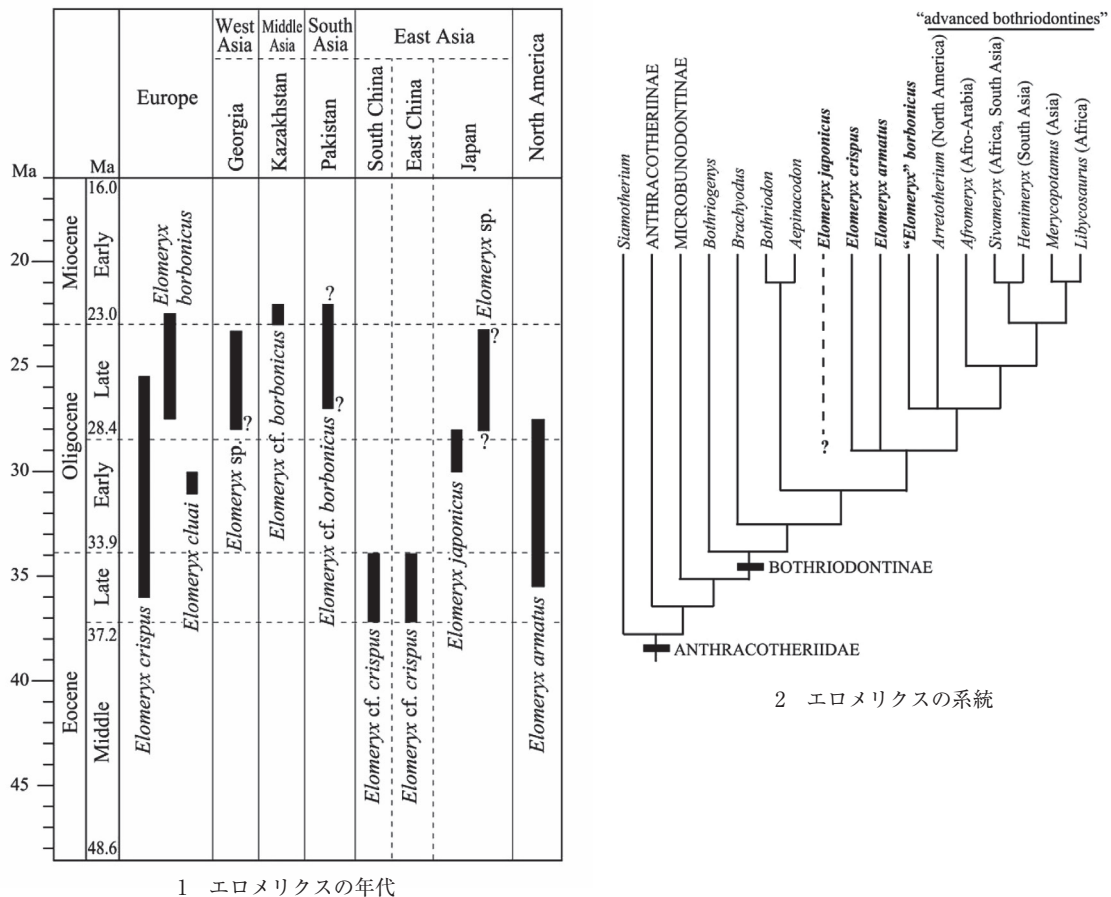


図10 *Elomeryx japonicus* の年代と系統

- 1 エロメリクスの年代 [Tsubamoto and Kohno 2011]
- 2 エロメリクスの系統 [Tsubamoto and Kohno 2011]

### 3 福島県三貫地貝塚のイヌの頭骨

福島県相馬市三貫地貝塚から発掘された縄文後・晩期のイヌの頭骨2個体(NMJH-1-2-32-1・2)については、直良がすでに記載している[直良1973:198-210]。本館に収蔵後、小宮孟(当時、千葉県立中央博物館)がより詳しく再記載したうえで、日本列島各地の遺跡から発掘されたイヌの骨との比較をおこなっている[小宮1995]。

その結果、三貫地のイヌは、中小型ないし小型で、ストップ(鼻骨の凹陷)の小さい集団に含まれ、比較した標本のなかではもっとも小さい。その一方、下顎骨の大きさの割に大きな第一大臼歯をもっており、他と区別される。三貫地のイヌにみえる顎の短縮に伴う歯列の不正は、頭骨の小型化に伴う現象であって、「古代犬の家畜化」が進行している証拠である、という。

#### 4 栃木県葛生産のヤマネコ

『目録』の巻頭写真に「19 ヤマネコの一種の下顎骨化石 栃木県佐野市葛生 1-1-19-2」と掲載したところ、この標本を目にした複数の研究者から、化石化がそれほど進んでおらず、「現生のイエネコ」の骨のまちがいが、との指摘をうけた。

そこで、この標本について初歩的な検討をおこなった。

この標本を入れてあった小ケースには「ヤマネコ *Felis microtis* 下部洪積世 会沢、宮田、洞窟」と書いたラベルが入っていた。しかし、直良の筆跡ではない。「会沢、宮田」は現在、行政上は佐野市会沢町 1129-1～1236-3 となっており、小字大久保が土地の登記名としてのみ残っているだけである。宮田は会社を創業した宮田徳次郎の姓をとったものであって、本来の地名ではない。ラベルの「下部洪積世」は「上部洪積世」の誤記であろう。

この骨を観察すると、枝骨三角窩の凹みや小穴に赤褐色土が残っているが、石灰分で骨に固着はしていないし、下部葛生層産の化石のように硬く重くはないけれども、新しい時代のものと一概にはいえない、と私は感じた。

直良コレクションのなかに同じ「会沢、宮田」の上部葛生層産の化石にオオカミの化石骨 (NMJH-1-1-19-1) が収蔵されている。両者を比較してみると、化石化の状態や付着している土はよく似ている (図 11)。このオオカミの骨について記載した直良の『日本産狼の研究』に目を通すと、「栃木県安蘇郡葛生町会沢大久保宮田石灰工業株式会社会沢採石場裂罅産」の項に、1952年12月17日に「ほとんど一頭分のオオカミの遺体」を発掘し、「褐色グマ、山猫など」の遺体も出土したとの記述がある [直良 1965: 20-22]。この「山猫」の遺体こそ「会沢、宮田」産の「ヤマネコ」の骨であろう (図 11・12)。

後述のように、「会沢、宮田」産のオオカミ頭骨の炭素 14 年代の測定はすでに実施され、その較正年代は「約 36,000-33,000 年前頃」、後期更新世に属することが確認されている [工藤 2016: 23]。

その一方、直良は『古代遺跡発掘の脊椎動物遺体』で報告した青森県下北郡東通り村尻屋崎採石場の裂罅出土の脊椎動物遺体のなかに *Rattus* sp. (クマネズミの一種) が含まれていたことについてふれ、「会沢採石場洞内堆積層には上部葛生層の一部を浸蝕して、古墳時代後期の鳥獣骨が沢山堆積している。したがって、この文化層からの混入が考えられるので、今にわかに、会沢出土の *Rattus* の遺骸を洪積層産と決定することはできない」と述べている [直良 1972: 169]。ここで「古墳時代後期」と記している獣骨のなかにオオカミの頭骨などが含まれている。炭素 14 年代測定によると、このオオカミの骨は縄文時代のものである。なお、直良は同書で、縄文時代以降の「家猫」について 1 点 1 点の記載をおこなっているけれども、「会沢、宮田」産の「山猫」について記載していない。また、直良はきちんと記述しなかったけれども、「会沢、宮田」を 1930 年代に調査した鹿間時夫は、かつては洞窟ないし裂罅が 5 箇所あったことを巧みな図にしている (図 13) [鹿間 1937a: 第Ⅻ図版]。それらはいずれも古い堆積物で充填されており、最近の獣骨が混入するような状況ではない。直良がオオカミやヤマネコの骨を収集した「会沢、宮田」の裂罅は、鹿間が図示した採掘崖に露出していた洞窟または裂罅のつづきであった可能性が高い。

「会沢、宮田」産の「ヤマネコ」の年代測定は実現していないけれども、「約 36,000-33,000 年前頃」のオオカミと同年代になる可能性が大きい、と私は考える。



図11 栃木県佐野市会沢町宮田採石場産のネコ下顎骨 (NMJH-1-1-19-2) とオオカミ下顎骨 (NMJH-1-1-19-1)

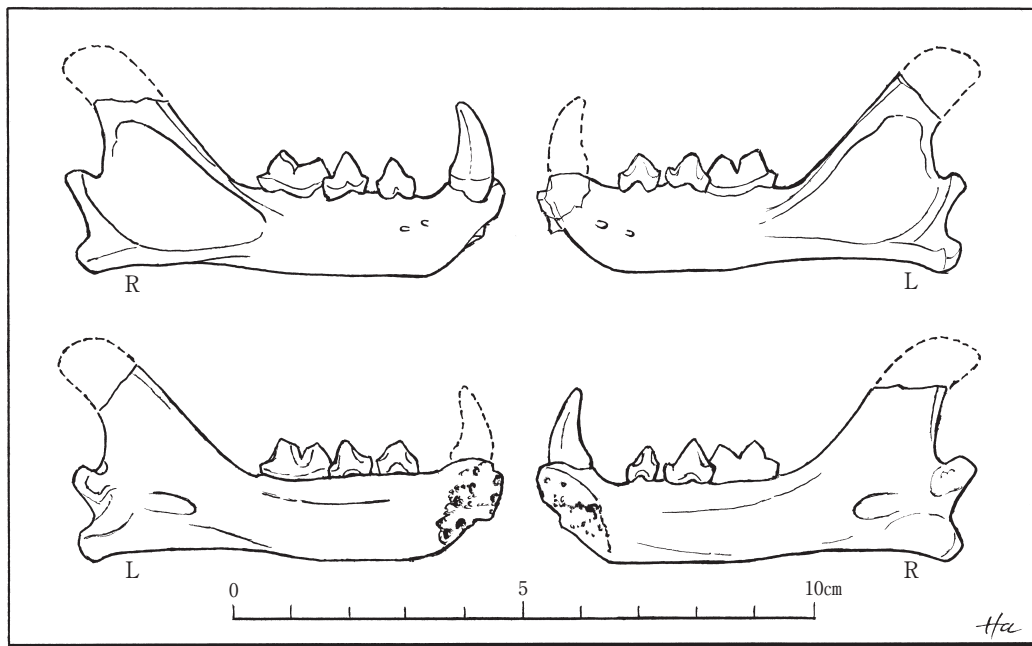


図12 栃木県佐野市会沢町宮田採石場産のネコの左右下顎骨 (NMJH-1-1-19-2)



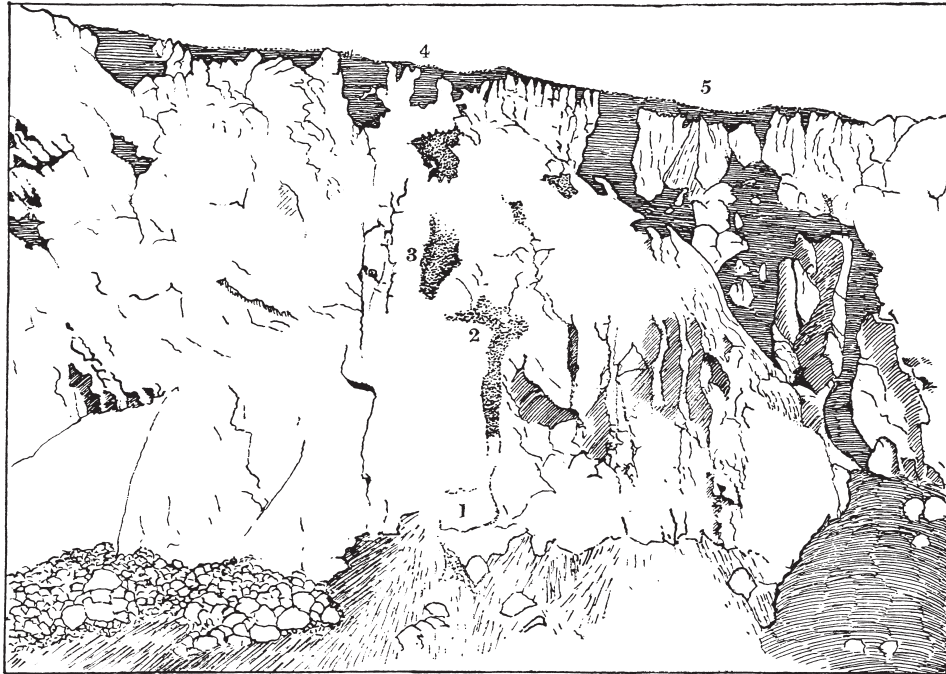


図 13 栃木県葛生町大久保宮田採石場(会沢宮田)に露出した裂罅 [鹿間 1937a]  
*Felis* cf. *microtis* の下顎骨は第 2 洞窟から出土

それではこのネコはなにのものであろうか。手元にある文献の図，神奈川県横浜市野島貝塚産のイエネコの遺体と初歩的な比較を試みた(図 14)。

この下顎骨標本は，下顎骨長(I<sub>1</sub>前辺—関節突起端)が7.4cm，P<sub>3</sub>-M<sub>1</sub>長は2.6cm，その大きさは野島産イエネコの下顎骨長6.4-5.2cm，P<sub>3</sub>-M<sub>1</sub>長2.0-1.8cmよりはるかに大きく，現生のツシマヤマネコ *Prionailurus bengalensis euphilura* (Eliot, 1871) (下顎骨長6.8cm，P<sub>3</sub>-M<sub>1</sub>長2.3cm) やイリオモテヤマネコ *Prionailurus bengalensis iriomotensis* (Imaizumi, 1967) (下顎骨長6.9cm，P<sub>3</sub>-M<sub>1</sub>長2.4cm) よりも大きいこと，ヒトの頤に相当する位置がく字形の角をもっていることが大きな特徴である。同じ宮田石灰工業会沢採石場の第2洞窟から過去に鹿間時夫が収集し，ネコ科の下顎骨 *Felis* cf. *microtis* (Milne-Edwards, 1871) と同定している標本(図 14-2) [Shikama 1949: 166-168] は，上部葛生層産であることが確かだとすれば，後期更新世のものである。P<sub>3</sub>-M<sub>1</sub>長2.1cm，鹿間の復元では下顎骨推定長6.2cmの小型で，残存部分ではイエネコとの区別は困難であって，形態，サイズともに直良コレクションの標本とは明らかに区別できる。*Felis microtis* は現在，ベンガルヤマネコのシノニムとされており，学名としては無効になっているけれども，中国北部の中期更新世，周口店動物群の一構成要素として認められてきた [Pei 1934: 144-147]。もっとも中国では，2006年の論文でも，山頂洞産のヤマネコを「似小野猫 *Felis* cf. *microtis* = *Felis bengalensis*」というような表現がみられる [同ほか 2006: 75]。周口店第1地点産の *Felis* cf. *microtis* は，P<sub>3</sub>-M<sub>1</sub>長2.4cmで，「会沢，宮田」産の2.6cmよりも小さい。また，下顎骨の下底部の先端はく字形を呈しており，現生のベンガルヤマネコ

とは明らかに異なり、むしろ「会沢、宮田」産に近い。下顎骨体高（P<sub>3</sub> 前端，M<sub>1</sub> 後端）は、「会沢、宮田」産：1.5cm，1.3cmに対して、ツシマヤマネコ：1.1cm，1.2cm，イリオモテヤマネコ：1.1cm，1.3cm，周口店第1地点産：1.0cm，1.3cm，イエネコ：1.0cm，1.1cm，会沢宮田産（鹿間標本）：0.8cm，1.1cmである。直良コレクションの「会沢、宮田」標本は他を圧する大きさを持ち、体高は近心側が遠心側よりもかなり高いのはツシマヤマネコや周口店第1地点産のヤマネコ、その他にみない大きな特徴である。

日本列島の後期更新世のアナグマ・オオカミ、縄文時代のニホンザルのサイズが完新世または現

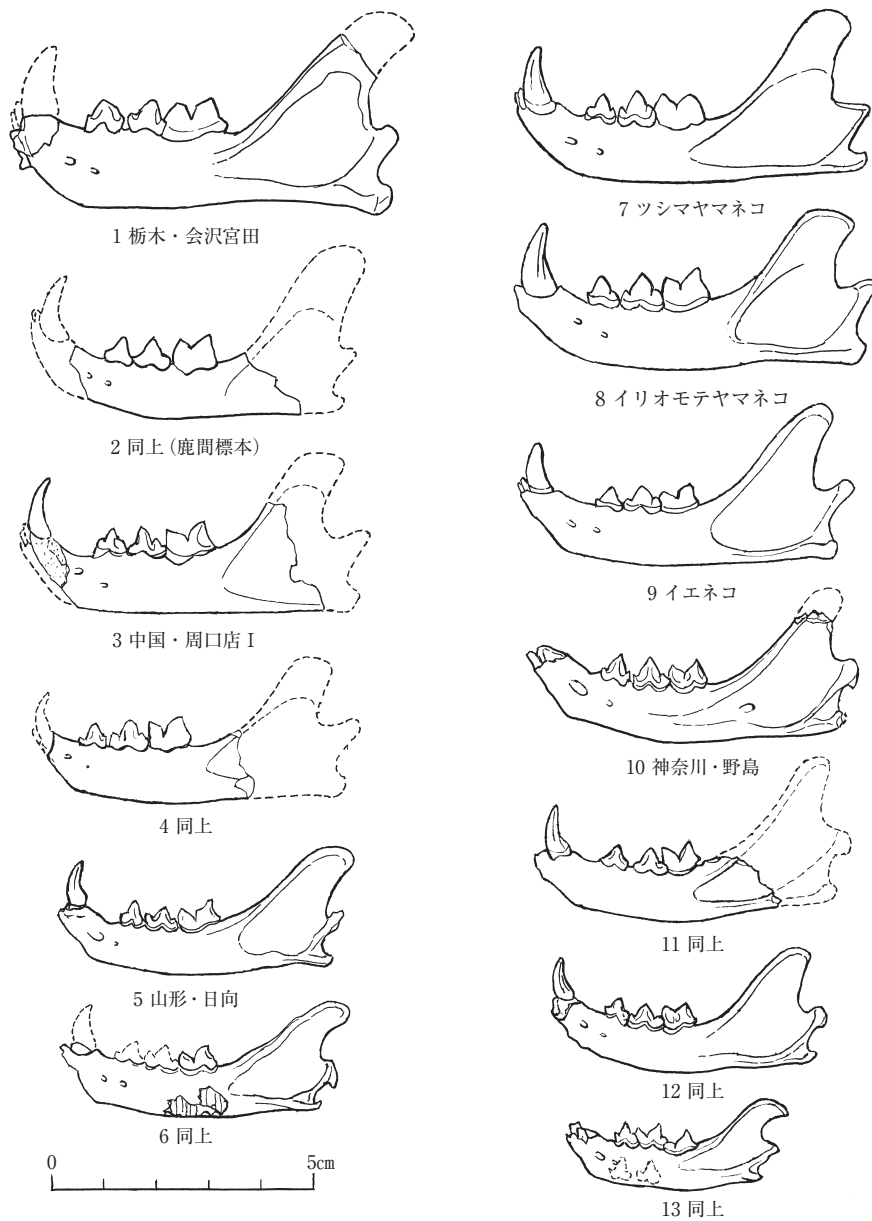


図14 栃木県会沢宮田産のネコの下顎骨の比較図

1：春成原図，2：[鹿間 1949]，3・4：[Pei 1934]，5・6：[直良 1972]，7～9：[阿部 2000]，10～13：[直良 1972] から作成。4・11・13 は比較のために図を反転している。

生のものより大きいことは、直良が早くから断片的に指摘している〔直良 1941:164, 180;1965:24, 直良（春成編）1999〕。鹿間時夫が会沢宮田採石場第 1 洞窟産のアナグマ化石を新亜種として報告した *Meles leucurus kuzuiensis* も、大型であることを根拠の一つにしていた〔Shikama 1949:137-146〕。

なお、ヤマネコの化石は日本列島では山口県山口市阿東（旧・阿武郡阿東町）生雲<sup>いくも</sup>にあった岡村石灰採石場の洞窟からの出土を長谷川善和（当時・横浜国立大学地学教室）は報告している〔長谷川 1966〕。しかし、"*Felis caracal*? Gray" とリストにあるだけで標本の正式記載はない。長谷川は別の機会に、「山口県下 2 地点からヤマネコよりやや大きい下顎骨が検出されている。鹿間の *Felis* cf. *microtis* とは明らかに異なる。時代は *Felis* cf. *microtis* より古いと考えられる」と述べている〔長谷川 1979〕。しかし、具体的な形態や根拠は示していない。

以上のような理由で、直良コレクションの「会沢、宮田」ネコの下顎骨は、産出地の推定年代、周口店第 1 地点産の *Felis* cf. *microtis* すなわち *Prionailurus bengalensis chinensis*、現生のベンガルヤマネコ・イエネコのそれとの決定的な大きさの違いから、後期更新世の「ヤマネコの一種」のままにしておく。この特徴ある標本の速やかな年代測定と、その結果にもとづく古生物学的研究を期待することにした。

直良は、先の戦争中に雑誌『古代文化』に連載していた「史前遺蹟出土の獣骨」のなかで、埼玉県柏崎村真福寺貝塚（縄文後・晩期）から出土したネコの脊椎骨を「ヤマネコ *Felis microtis* Milne-Edwards」と同定している〔直良 1942:231〕。さらに、東京都大田区馬込貝塚出土のネコの頭骨片を、「南アジア産野猫」、「満州顧郷屯発掘化石野猫」、「日本産家猫」と比較して「家猫 *Felis domesticus* Gmelin」と同定している。馬込貝塚標本は、顔面長が長く、眼後の括れが鈍いという特徴をもち、「家猫」よりも「野猫」に類似している（図 15-2）。しかし、前頭骨の後方の形状は「野猫」よりも「家猫」にはるかに近い。これを直良が「家猫」としたのは、馬込貝塚が縄文後期に属し、「家畜として他に犬や馬などを有していた事からすると、必ずしも家猫をもっていなかったとは云われぬ」という、骨学的な特徴よりも時代背景を優先させての判断であった。やはり形質と年代の双方が問題である。なお、顧郷屯発掘の「野猫」の頭蓋骨標本は、長さが短く丸みがつよい形態的特徴と、「化石化ノ度著シク弱シ。…温泉河ニ接スル地表下 1 米半程ノ含化石層中ヨリ」発掘、「含蔵セラレタル状態ヨリスレバ一頭分整ヒテ存セシガ如キ」という点〔徳永・直良 1934:50, 第 XI 図版 1, 1939:25〕から判断すると、マンモス・ステップバイソン・オールドスオオツノジカに石器を伴う下部顧郷屯層から産出したのではなく、獣類化石が再堆積している温泉河層（黒色泥層）から産出した新しい時代のイエネコではないだろうか。顧郷屯何家溝の堆積物の層序関係は、鹿間時夫らの調査結果〔鹿間 1943:81, 鹿間 1952:8-15〕がもっとも信頼できると私は考えるからである。

現在ではイエネコとノネコは *Felis catus* (Linnaeus, 1758) の同種異和名として扱われている。日本列島で現在知られているイエネコの最古例は長崎県壱岐市カラカミ貝塚出土の弥生後期、約 2,000 年前のものとして知られている〔納屋内ほか 2008, 小林ほか 2008, 丸山ほか 2014〕。ただし、標本は幼獣の四肢骨である。弥生時代に稲倉を襲うネズミの難を避けるための装置としてネズミ返しを倉の柱につける一方、ネズミを駆除するためにイエネコを朝鮮半島から移入したのであろう。

直良コレクションに含まれている神奈川県横浜市野島貝塚（図 16）から出土した 4 個体分のイ

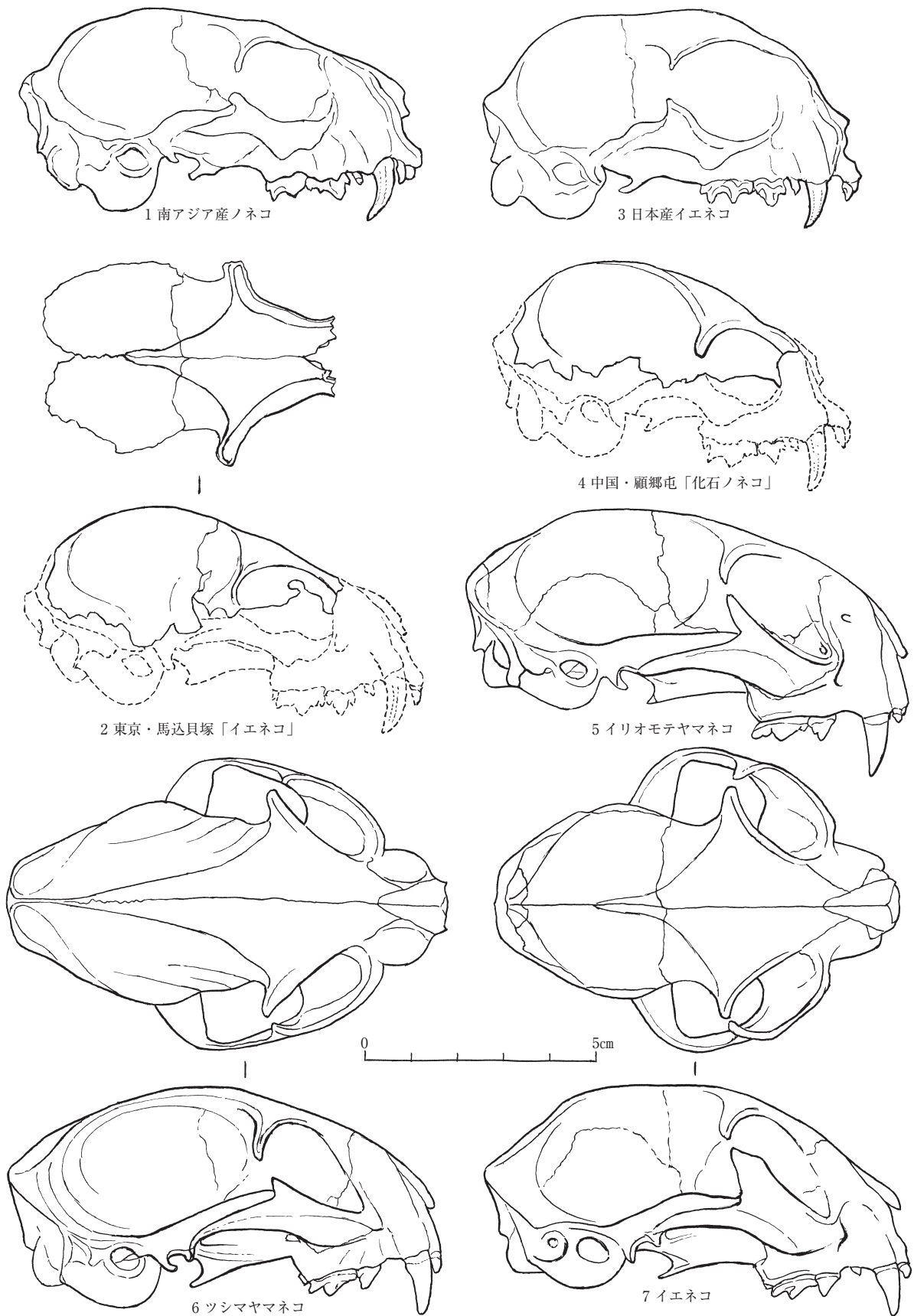
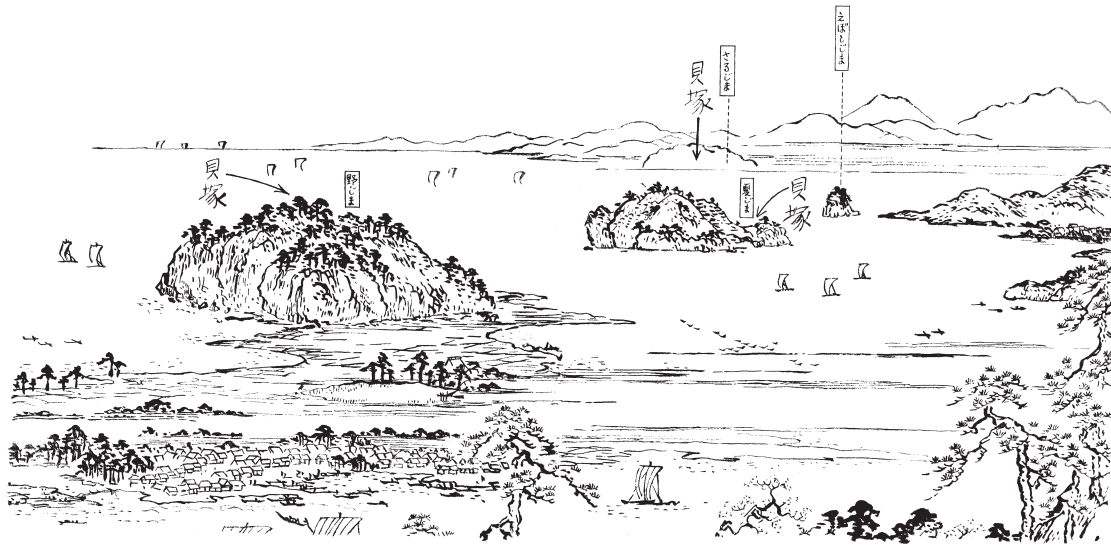
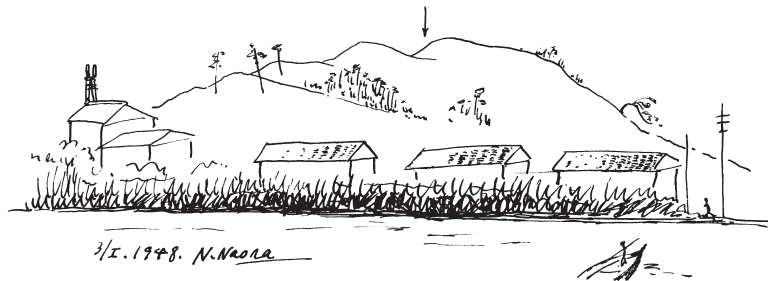


図15 東京都馬込貝塚産の「イエネコ」の頭蓋骨の比較図 1~4: [直良1942], 5~7: [阿部2000] から作成



『江戸名所図会』(直良模写)



3/E. 1948. N. NAORA

(直良スケッチ)

図 16 神奈川県横浜市野島貝塚の位置 夏島貝塚の位置は春成が訂正

エネコの骨 (NMJH-1-2-72) について、直良は1972年にまとめた『古代遺跡発掘の脊椎動物遺体』で「当初私たちは、猫骨は縄文式文化期のものだ」と信じていたものであるが、「上層に土師器片をわずかに含む文化層があって、この文化層から猫骨が原生状態を保って出土することが、後になって知られた」と訂正した[直良1972:18]。しかし、その「土師器片」はのこっておらず、共伴という情報だけでは厳密な年代はわからない。野島貝塚のネコの下顎骨は、縄文時代の貝塚産の獣骨とくらべると、カサカサのきわめて軽量の骨であって、粗鬆な土壤中に埋まっていた、いかにも新しい時代の骨という印象を与える。図示したなかでも大小の差が大きいだけでなく(下顎骨長6.4-5.2cm)、下顎骨底の形態に変異が大きい(図14-10~13)。なお、野島貝塚のネコの標本を調べた長谷部言人は、「前期縄文産として疑もない野ネコが頭骨の計測では家ネコと区別できないというのは、意義深い新所見らしい。しかし、野島貝塚産のヤマネコを「内地産ネコ」の祖先とはいえない」と述べている[長谷部1956:130-131]。長谷部も野島貝塚の標本の年代を疑うことなく、奇妙な結論を下していた。直良が同書で記述している縄文時代とされる諸例もすべて所属年代について確実性を欠いており、直良コレクションのなかに含まれている他の貝塚から出土したネコの骨もあわせて、活用できる資料にするには、年代測定と形態比較が不可欠である。直良が同書で報告している山形県高島町日向洞窟(縄文草創期~前期、山形大学標本)出土のネコの下顎骨2個体[直良1972:9-12]は、下顎骨長が5.3cmと5.5cmで、現生のイエネコの6.4cmよりも小型で、「会沢、宮田」

産の「ヤマネコ」とくらべるとはるかに小型である。ベンガルヤマネコの形態とも異なるので、縄文時代までさかのぼるかどうか、これも年代測定が必要である。

### 5 栃木県葛生産のオオカミの頭骨

直良コレクションのなかで重要な位置を占めているのは、オオカミ、イヌの頭骨標本である [直良 1965]。最近、甲能純子<sup>あやこ</sup> (国立科学博物館研究員) と甲能直樹は、日本列島のオオカミの形質の時間的な変移を追究しており、2015年、甲能は栃木県佐野市会沢町宮田石灰工業会沢採石場の裂罅から出土したオオカミの頭骨 (NMJH-1-1-19-1) (図 11 下)、および同所の黒土層から出土したオオカミの骨 (NMJH-1-2-41-2) の炭素 14 年代を測定した。後者は、同層から「鉄製の鋤頭が出土した」という現場事務所の人の言にもとづいて、直良が「古墳時代」と推定していた標本である。測定の結果、前者は約 36,000-33,000 年前、すなわち後期更新世でよいが、後者は縄文時代までさかのぼることになったという [工藤 2016 : 23]。詳しくは近々発表とのことである。出土の状況についての情報が不足しているような動物骨の資料は、年代測定を実施することによってのみ研究資料としての価値が生じることを、この研究はよく証明している。

なお、『目録』の巻頭写真「2 オオカミの上・下顎骨化石 栃木県佐野市葛生大叶 (NMJH-1-1-18-1)」の標本および福岡県松ヶ江吉志洞窟のアカオオカミ (*Cuon* sp.) の骨 (NMJH-1-1-35) については、1939年に斎藤弘が報告している [斎藤 1939]。そして、葛生のオオカミの標本と同一個体の右上顎骨前半部と左右下顎骨の筋突起部分は鹿間時夫が記載している [Shikama 1949 : 54, text-fig. 57]。鹿間は徳永重康のコレクション中に同

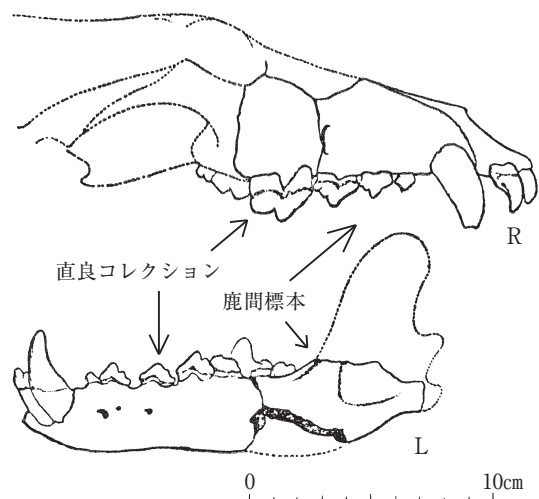


図 17 栃木県佐野市葛生大葉産のオオカミ頭骨化石 (NMJH-1-1-18-1) と関連標本  
図は [Shikama 1949]

一個体の一部が含まれていることを知っており、その部分を自らの収集品と図上で接合し論文のなかで示していることを甲能直樹から教示された（図17）。鹿間標本は現在、東北大学総合学術博物館蔵となっている。

以上に述べたように、直良信夫コレクションは本館に収蔵し、その目録を公けにしたことにより、館内外の研究者による資料へのアクセスが可能になり、目録の訂正も含めて成果がでてくるようになった。古生物学の分野では、公的機関で保管され、登録番号をもつ標本のみを研究対象とし、個人蔵の標本は研究対象から外すという国際的な約束事がある。その場所で永久に保管され、調査研究の自由や発表の自由が保証されている標本でなければ、研究資料として認められないのである。

直良コレクションの価値が評価されている事実は、このコレクションの形成にかかわった者として本当にうれしいことである。しかし、直良コレクションは昭和時代の収集品であって、出土の状況ははっきりしないものが少なくない。今回取りあげた資料についても、会沢宮田産や野島貝塚産のネコの骨や佐渡鷺崎セコノ浜のイノシシの骨のように、炭素14年代測定をおこない所属年代を明らかにしないかぎり、今日のサイエンスの世界では研究資料として扱ってもらえないものがある。

1962年、鹿間時夫・小貫義男は、岩手県大船渡市地ノ森の段丘礫層と宮城県田尻町田尻中学校グラウンドの拡張工事現場から産出した馬骨を、歯牙の形態と小型であることを根拠にして後期更新世の馬の新種 *Equus nipponicus* と命名して発表した [Shikama and Onuki 1962]。それから35年後、A. フォーステン（フィンランド自然史博物館）が地ノ森産の馬骨の炭素14年代測定を実施した結果、その年代は  $1,530 \pm 60$  年 B.P., つまり5, 6世紀頃の家畜馬ということになった [Forsten 1997]。鹿間らの論文は11頁と3図版からなる一方、フォーステンの論文は本文1頁、しかし2行の要旨を読めば済む。骨の年代測定が普及する以前におこなった鹿間らの研究は、詳細なものであったけれども徒労に終わったのである。

このような教訓に学び、問題のある資料については所蔵機関としての歴博には、年代測定作業を積極的に推進し、今後いっそう有効に活用できるようにしていただきたい、とつよく要望する所である。

この一文を草するにあたって甲能直樹（国立科学博物館筑波生命進化史研究グループ）、遠藤秀紀（東京大学総合研究博物館）、工藤雄一郎（国立歴史民俗博物館研究部考古系）、上奈穂美（同前 研究員）、根本潤（東北大学総合学術博物館）、丸山真史（東海大学海洋学部）、奥村よほ子（葛生化石館）の諸氏のお世話になったことを記し、あつくお礼申しあげる。

---

## 文献

- 阿部 永 2000 『日本産哺乳類頭骨図説』北海道大学図書刊行会。  
 今泉吉典 1984 「グリソン」『大百科事典』4, p.920, 平凡社。  
 岡崎美彦 1982 「博物館資料 3. マツガエサイ *Rhinoceros sinensis* OWEN」『わたしたちの自然史』第10号, p.24, 北九州市立自然史・歴史博物館。  
 岡崎美彦 2003 「山口県肥前鍋島から産した漸新世ブラキオダス化石」 *Bulletin of Kitakyushu Museum of Natural History and Human History*, Ser.A Natural History, no.1, pp.9-12, 北九州市立自然史・歴史博物館。  
 荻野慎太郎・大塚裕之 2005 「北東部九州の洞穴堆積層産中期更新世松ヶ枝動物群に見出された *Macaca* 属 (*Macaca cf. fuscata*) 化石の形態学的研究」『霊長類研究』第21号, pp.1-9。
-

- 
- 荻原武平 1925「企救半島の象の化石」『地質学雑誌』第32巻第387号, p.528.
- 河村善也 1991「ナウマンゾウと共存した哺乳類」(亀井節夫編)『日本の長鼻類化石』pp.164-170, 築地書館.
- 工藤雄一郎 2016「歴史の証人 更新世のニホンオオカミ化石—直良信夫コレクション」『歴博』第195号, pp.20-23, 国立歴史民俗博物館.
- 小林紘一・丹生越子・伊藤 茂・廣田正史・瀬谷 薫 2008「カラカミ遺跡出土ネコ脛骨の放射性炭素年代測定」(宮本一夫編)『沓岐カラカミ遺跡1—カラカミ遺跡東亜考古学会第2地点の発掘調査—』pp.145-146, 九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室.
- 小宮 孟 1995「福島県三貫地貝塚出土の縄文犬骨の再記載」『千葉県立中央博物館研究報告』第4巻第1号, pp.27-43.
- 斎藤 弘 1939「満州顧郷屯発掘ノ犬科化石並ニ日本ニ発見セル犬科化石ニ就テ」『第一次満蒙学術調査研究団報告』第二部第四編, 地質学IV, pp.1-19, 第一次満蒙学術調査研究団.
- 鹿間時夫 1937a「葛生層(裂罅堆積物)の地質学的研究(第2報)」『東北帝国大学理学部地質学古生物学教室研究邦文報告』第27号, pp.1-35, 第I—第VIII図版.
- 鹿間時夫 1937b「日本産化石長鼻類の標本産地及び文献」『斎藤報恩会時報』第122号, pp.9-28.
- 鹿間時夫 1943「哺乳動物より観たる東亜の洪積世について(1)」『国立中央博物館論叢』第6号, pp.9-110, 満州国立中央博物館.
- 鹿間時夫 1952「満州の第四紀」『東亜地質産誌』満州・層位10, pp.1-10.
- 鹿間時夫(藪内正幸画) 1979『古脊椎動物図鑑』朝倉書店.
- 芹沢長介 1970「兵庫県西八木出土旧石器の再検討」『考古学研究』第17巻第1号, pp.29-38, 図版1・2.
- 徳永重康 1925「佐世保伊万里炭田と其時代」『地学雑誌』第37年第404号, pp.557-567, 第9図版.
- 徳永重康 1930「洪積期時代本州九州朝鮮に於ける獣類穴居の遺跡」『日本学術協会報告』第6巻, pp.175-178.
- 徳永重康 1934「哺乳類」『岩波講座地質学・古生物学』岩波書店.
- 徳永重康・直良信夫 1934『満州帝国吉林省顧郷屯第一回発掘物研究報文』『第一次満蒙学術調査研究団報告』第二部第一編, 119p.42pl.
- 徳永重康・直良信夫 1939「満州帝国哈爾濱顧郷屯発掘ノ古生物」『第一次満蒙学術調査研究団報告』第二部第四編, pp.1-229, pl.1-22.
- 直良信夫 1938「三宅島コハマ浜弥生式遺跡発掘の豚の臼歯」『人類学雑誌』第53巻第2号, pp.28-30.
- 直良信夫 1941『古代の漁猟』葦牙書房.
- 直良信夫 1942「史前遺蹟出土の獣骨(八)」『古代文化』第13巻第4号, pp.231-242.
- 直良信夫 1944『日本哺乳動物史』甲鳥学書9, 養徳社.
- 直良信夫 1954『日本旧石器時代の研究』早稲田大学考古学研究室報告, 第2冊, 寧楽書房.
- 直良信夫 1958「日本産の化石アカオオカミについて」『早稲田大学理工学部研究所報告』第10輯, pp.53-59.
- 直良信夫 1965『日本産狼の研究』校倉書房.
- 直良信夫 1972『古代遺跡発掘の脊椎動物遺体』校倉書房.
- 直良信夫 1973『古代遺跡発掘の家畜遺体』日本中央競馬会弘済会.
- 直良信夫(春成秀爾編・解説) 1987『大歳山遺跡の研究』239p., 真陽社.
- 直良信夫(春成秀爾編・解説) 1991『近畿古代文化論考』877p., 木耳社.
- 直良信夫(春成秀爾編, 大塚裕之・春成秀爾解説) 1997『日本および東アジアの化石鹿』294p., 直良信夫論文集刊行会.
- 直良信夫(春成秀爾編・解説) 1997「佐渡の自然遺物」『動物考古学』第9号, pp.87-115.
- 直良信夫(春成秀爾編・解説) 1999「日本産アナグマ」『動物考古学』第13号, pp.79-129.
- 直良信夫(春成秀爾編・解説) 2000「日本産カワウソ」『動物考古学』第15号, pp.115-143.
- 納屋内高志・松井 章 2008「カラカミ遺跡出土の動物遺存体」(宮本一夫編)『沓岐カラカミ遺跡1—カラカミ遺跡東亜考古学会第2地点の発掘調査—』pp.129-144, 九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室.
- 長谷川善和 1966「日本の第四紀小型哺乳動物化石相について」『化石』第11号, pp.31-40.
- 長谷川善和 1979「日本産食肉獣の概要」『哺乳類科学』第38号, pp.23-28.
- 長谷川善和・金子浩昌・橘麻紀乃・田中源吾 2011「日本における後期更新世—前期完新世産のオオヤマネコ *Lynx* について」『群馬県立自然史博物館研究報告』第15号, pp.43-80.
- 長谷部言人 1948「明石市附近西八木最新世前期堆積出土人類腰骨(石膏型)の原始性に就いて」『人類学雑誌』第60巻第1号, pp.32-37.
-



- 長谷部言人 1956 「野鳥貝塚出土ネコ頭骨について」『人類学雑誌』第65巻第3号, pp.128-134.
- 春成秀爾 1984 「明石人問題」『旧石器考古学』29, pp.1-30, 旧石器文化談話会.
- 春成秀爾 1987 「西八木層出土の人工遺物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第13集, pp.55-82.
- 春成秀爾 2005 「「石の骨」の虚実」『考古学はどう検証したか』pp.456-495, 学生社 (初出2005『松本清張研究』第6号, pp.92-120, 北九州市立松本清張記念館).
- 春成秀爾 2013 「明石人骨発見地点の写真」『旧石器考古学』78, pp.35-44, 図版1-4, 旧石器文化談話会.
- 春成秀爾・小林紘一・ザウリ ロムタティゼ・伊藤 茂・尾寄大真・山形秀樹・廣田正史・イネサ ジュルジョアーニ・丹生越子 2012 「明石市西八木層出土遺物と炭素14年代測定」『旧石器研究』第8号, pp.145-153, 日本旧石器学会.
- 春成秀爾編 1987 「明石市西八木海岸の発掘調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第13集, 304p. 39pl.
- 春成秀爾編 2008 『直良信夫コレクション目録』国立歴史民俗博物館資料目録7, 246p., 国立歴史民俗博物館.
- 松本清張 1955 「石の骨」『別冊文芸春秋』第48号, pp.196-214. (1958『或る「小倉日記」伝』pp.134-168, 角川文庫1762, 角川書店, ほかに再録).
- 丸山真史・小舟みなみ・松井 章 2014 「カラカミ遺跡から出土した魚類遺存体および哺乳類遺存体」『天手長男神社遺跡・市史跡カラカミ遺跡2次』pp.163-180, 壱岐市教育委員会.
- 湊 正雄 1974 『日本の第四系』築地書館.
- 山崎京美 2010 「イノシシ飼育」『縄文時代の考古学』第4巻, 人と動物の関わりあい, pp.149-166, 同成社.
- 中国科学院古脊椎動物与古人類研究所編 1979 『中国脊椎動物化石手冊』増訂版, 科学出版社.
- 同 号文・尚 虹・張 双権・劉 金毅・陳 福友・吳 小紅・李 青 2006 「周口店田園洞古人類化石点地層学研究及与山頂洞的对比」『人類学学報』第25巻第1期, pp.68-81.
- Endo, B. and Baba, H. 1982 Morphological Investigation of Innominate Bones from Pleistocene in Japan with Special Reference to the Akashi Man. 『人類学雑誌』第90巻別号, pp.27-53.
- Endo, B. and Baba, H. 1985 Examination of Nonmetric Characters of the Form of Innominate Bones from Pleistocene in Japan. 『人類学雑誌』第93巻第4号, pp.461-486, 第94巻第1号, pp.39-49.
- Forsten, A. 1997 A note on the Jinomori horse, *Equus nipponicus* Shikama and Onuki (Mammalia, Equidae), and some other equine remains from Japan. *Paleontological Research*, vol.1, no.4, pp.316-317.
- Hasegawa, Y. 1972 The Naumann's Elephant, *Palaeoaloxodon naumanni* (Makiyama) from the late Pleistocene off Shakagahana, Shodoshima Is. In Seto Inland Sea, Japan. *Bulletin of National Science Museum*, vol.15, no.3, pp.513-591, pl.1-22.
- Kusuhashi, N., Tsutsumi, Y., Saegusa, H., Horie, K., Ikeda, T., Yokoyama, K. and Shiraishi K. 2013 A new Early Cretaceous eutherian mammal from the Sasayama Group, Hyogo, Japan. *Proceedings of the Royal Society B*.280, p.1759.
- Matsumoto, H. 1915 On Some Fossil Mammals from Sze-chuan, China. *The Science Reports of the Tohoku Imperial University, Sendai, Japan*, Second Series (Geology), Vol. III, No.1, pp.1-28, pl. I-X.
- Naora, N. 1968 The fossils of otters discovered in Japan. *Memories of the School of Science and Engineering Waseda University*, vol.32, pp.1-11.
- Ogino, S. and Otsuka, H. 2008 New middle Pleistocene Galictini (Mustelidae, Carnivora) from the Matsugae cave deposits, northern Kyushu, West Japan. *Paleontological Research*, vol.12, no.2, pp.159-166, Paleontological Society of Japan.
- Ogino, S., Otsuka, H. and Harunari, H. 2008 The middle Pleistocene Matsugae fauna, northern Kyushu, West Japan. *Paleontological Research*, vol.13, no.4, pp.367-384.
- Pei, W.C. 1934 On the Carnivora from locality I of Choukoutien, *Paleontologia Sinica*, Ser.B, vol.8, no.2, pp.7-165.
- Shikama, T. 1939 Discovery of Giant Fallow Deer from the Pleistocene of Japan. *Japanese Journal of Geology and Geography*, vol. 16, no.12, pp.115-122.
- Shikama, T. 1949 The Kuzuü Ossuaries, Geological and Paleontological Studies of the Limestone Fissure Deposits in Kuzuü, Totigi Prefecture. *The Science Reports of the Tohoku University*, Ser.2, vol.23, pp.1-201.
- Shikama, T. and Onuki, Y. 1962 Equid Fossils from Iwate and Miyagi Prefectures. *The Science Reports of the Tohoku University*, Ser.2, vol.34, no.2, pp.187-197.

---

Teilhard de Chardin, P. and Leroy, P. 1942 *Chinese Fossil Mammals : A Complete Bibliography Analysed, Tabulated, Annotated and Indexed*. Institut de Geo-Biologie, Pekin.

Tsubamoto, T. and Kohno, N. 2011 Reappraisal of *Brachyodus japonicus*, an Oligocene anthracotheriid cetartiodactyl from Japan. *Paleontological Research*, vol.15, no.3, pp.115-124.

(国立歴史民俗博物館名誉教授)

(2015年12月28日受付, 2016年3月29日審査終了)